

列王記第二11-13章 「エリシャの霊的遺産」

1A 途絶えない王権 11

1B イゼベルの娘 1-3

2B 正義の執行 4-16

3B 契約の更新 17-21

2A 後戻りの富 12

1B 神殿修繕 1-16

2B 尊厳の喪失 17-21

3A 憐れみの救い 13

1B アラムによる懲らしめ 1-9

2B 主の勝利 10-25

アウトライン

列王記第二 11 章を開いてください。私たちは前回、エリシャが、ハザエルがアラムの王になることを宣言し、また預言者のともがらがイスラエルの将軍エフーに油を注いだところを読みました。ベン・ハダデ二世が王でしたが、家来のハザエルが殺し、そしてハザエルが、神に背くイスラエルを攻める、神の裁きの器となっていくます。そしてエフーは、イスラエルのアハブ家を根絶やしにする神の裁きの器として用いられます。エリシャは、この働きをもってほとんど全ての務めを、少なくとも列王記の記述の中では終えています。けれども、今日読むところには彼が死ぬ直前、いや死んだ後も神の働きを行なっていく姿を見ていくことができます。

その中で、イスラエルの国で、またユダの国においても、主が生きて働いておられる姿を 11 章から 13 章の中で見るすることができます。これは、確かにエリシャが世の光として、地の塩として、両国に存在していたことを示す証しです。

1A 途絶えない王権 11

1B イゼベルの娘 1-3

11:1 アハズヤの母アタルヤは、自分の子が死んだと知ると、ただちに王の一族をことごとく滅ぼした。11:2 しかし、ヨラム王の娘で、アハズヤの姉妹のエホシェバが、殺される王の子たちの中から、アハズヤの子アシュを盗み出し、彼とそのうばとを寝具をしまう小部屋に入れて、彼をアタルヤから隠した。それで、彼は殺されなかった。11:3 こうして、彼はうばとともに、主の宮に六年間、身を隠していた。その間、アタルヤがこの国の王であった。

アタルヤは、アハブ王の妻イゼベルの娘です。私たちは前回、イスラエルの王ヨラムがラモテ・ギルアデの戦いで負傷し、イズレエルで傷を癒すため休んでいたところ、ユダの王アハズヤが見舞

いに来たのですが、その時にエフーが来て二人を殺したところを読みました。ヨシャパテの息子ヨラムがこのアタルヤと結婚し、そしてアハズヤが生まれましたが、アハズヤもバアル信仰を継承していました。そして、エフーはサマリヤにいるアハブの子七十人を殺しましたが、その王の子らに会いに来たアハズヤの身内の者たちをも殺しました。

しかし、アタルヤは死んでいません。エフーは、イスラエル国内では徹底的な宗教改革を行いませんでしたが、ユダの国の中にまで入ることはありませんでしたから、もちろん生き残っています。そして彼女は母親顔負けの恐ろしいことをします。これが、バアルを拜む者の本当の姿です。彼女は王の一族をことごとく滅ぼしました。これは霊的に非常に恐ろしいことを行なっています。ダビデの子らに神はご自分の国を与えられ、それがユダ国であるのに、彼女はそれを滅ぼし、不法に自分が女王となったのです。まるでナルニア王国の白い魔女のようですが、まさにその通りで、この世界は神のものであるのに、不法に支配しているサタンの仕業と同じであります。

しかし、神はこの悪魔の仕業によってご自分の計画を無効にされるような、無力な方ではありません。これまで、子孫が滅ぼされそうになっても、主がある人を用いて必ず残しておられました。パロの手から、助産婦を用いてヘブル人の男の子たちを救われました。イエス様ご自身がそうですね、ヘロデはベツレヘムの男の子を虐殺しましたが、御使いによってヨセフは妻と幼子を連れて、エジプトに下りました。そしてアハズヤの子ヨアシュを救い出したのは、アハズヤの姉妹エホシエバです。彼女は主なる神を信じていました。歴代誌第二によりますと、彼女は、宗教改革を断行する祭司エホヤダの妻です(22:11)。

そして六年の間、アタルヤが王であることを知りつつも、この子を表に出すことをしませんでした。七歳という王としての最低適齢期が来るまでは表に出しませんでした。けれども神の宮の奥において、彼を主にあって祭司エホヤダは育てることができました。アタルヤが最悪の治世をユダにもたらしていることを知っていても、主にあって育てることを優先させたのです。これはちょうど、主ご自身の三十年間に似ていますね。およそ三十歳になるまで、人としてのイエス様は神にあって育っていられました。この世は悪魔に翻弄されていましたが、それでも時が熟するのを待っておられたのです。

2B 正義の執行 4-16

11:4 その第七年目に、エホヤダは使いを遣わして、カリ人、近衛兵の百人隊の長たちを主の宮の自分のもとに連れて来させ、彼らと契約を結び、主の宮で彼らに誓いを立てさせ、彼らに王の子を見せた。

カリ人とは、ケレテ人のことで、ダビデに忠誠を誓った兵士たちです(2サムエル 20:23)。彼らはダビデの子孫が王にならなければいけないことをよく知っていた人々でした。そこでエホヤダは、決してまだ口外してはならないという約束を、契約を結ばせ、誓いを立てさせることによって行い、

それから王の子を見せました。

11:5 それから、彼は命じて言った。「あなたがたのなすべきことはこうです。あなたがたのうちの三分の一は、安息日に勤務して王宮の護衛の任務につく者となる。11:6 三分の一はスルの門におり、他の三分の一は近衛兵舎の裏の門にいる。あなたがたは交互に王宮の護衛の任務につく。11:7 あなたがたのうち二組は、みな、安息日に勤務しない者であるが、主の宮で王の護衛の任務につかなければならない。11:8 おのおの武器を手にし、王の回りを取り囲みなさい。その列を侵す者は殺されなければならない。あなたがたは、王が出るときにも、はいるときにも、いつも王とともにいなさい。」

王をこれから人々の前に出します。そこで反抗する者たちが出てきた時に備えて、護衛の計画を綿密に立てます。安息日に王を出しますが、安息日の勤務ではない二組もそれぞれの場所でアタルヤにつく者たちが入ってこられないようにその門を守ります。そして安息日の時に、このことを実行します。勤務交代がその直前に通常行なわれるので、護衛兵の移動があっても変に思われないからです。

11:9 百人隊長たちは、すべて祭司エホヤダが命じたとおりに行なった。おのおの自分の部下、すなわち安息日に勤務する者、安息日に勤務しない者を率いて、祭司エホヤダのところに来た。11:10 祭司は百人隊長たちに、主の宮にあったダビデ王の槍と丸い小盾を与えた。11:11 近衛兵たちは、ひとりひとり武器を手にして、神殿の右側から神殿の左側まで、祭壇と神殿に向かって王の回りに立った。11:12 こうしてエホヤダは、王の子を連れ出し、彼に王冠をかぶらせ、さとの書を渡した。彼らは彼を王と宣言した。そして、彼に油をそそぎ、手をたたいて、「王さま。ばんざい。」と叫んだ。

彼らは、王の子を護衛するのにふさわしく、ダビデ王の槍と小盾の武器を手にしています。そして王の即位です。エフーがかつて、預言者のともがらによって油注がれたように、油が注がれています。そして、さとの書が渡されています。これはモーセが、イスラエルから出る王に対して命じていたことです。「彼がその王国の王座に着くようになったなら、レビ人の祭司たちの前のものから、自分のために、このみおしえを書き写して、自分の手もとに置き、一生の間、これを読まなければならない。それは、彼の神、主を恐れ、このみおしえのすべてのことばとこれらのおきてとを守り行なうことを学ぶためである。(申命 17:18-19)」王が徹底的に神の律法に聞き従うことによって、王自身が神の主権の下に入り、ユダの国が、神ご自身が統治する国になることができます。

11:13 アタルヤは近衛兵と民の声を聞いて、主の宮の民のところに行った。11:14 見ると、なんと、王が定めのとおり、柱のそばに立っていた。王のかたわらに、隊長たちやラッパ手たちがいた。一般の人々がみな喜んでラッパを吹き鳴らしていた。アタルヤは自分の衣服を引き裂き、「謀反だ。謀反だ。」と叫んだ。11:15 すると、祭司エホヤダは、部隊をゆだねられた百人隊長たちに命じ

て言った。「この女を列の間から連れ出せ。この女に従って来る者は剣で殺せ。」祭司が「この女は主の宮で殺されてはならない。」と言ったからである。11:16 彼らは彼女を取り押えた。彼女が馬の出入口を通過して、王宮に着くと、彼女はそこで殺された。

謀反はどちらなのか？ヨアシュではなく、まさにアタルヤであります。彼女が不法に王座に着いていたのであり、彼女を殺したのは、その不法占拠に対して正義を行使したまでのことです。これはまさに、ダビデの子であられるイエス様ご自身が、悪魔が暴れるこの地上に來臨されて、悪魔を底知れぬ所に縛り付け、千年後にゲヘナに投げ込むのと同じです。

3B 契約の更新 17-21

11:17 エホヤダは、主と王と民との間で、主の民となるという契約を結び、王と民の間でも契約を結んだ。11:18 一般の人々はみなバアルの宮に行って、それを取りこわし、その祭壇とその像を徹底的に打ち砕き、バアルの祭司マタンを祭壇の前で殺した。祭司エホヤダは、主の宮の管理を定めた。11:19 彼は百人隊長たち、カリ人、近衛兵たちとすべての一般の人々を率いた。彼らは王を主の宮から連れ下り、近衛兵の門を通過して、王宮にはいった。彼は王を王座に着けた。

エホヤダは、二種類の契約を結ばせました。一つは、王と民が主に対して、主の民となるという契約です。これは、主がモーセに対して与えられた契約を認め、更新した、改めて認めたものであります。「ついで、モーセとレビ人の祭司たちとは、すべてのイスラエル人に告げて言った。静まりなさい。イスラエルよ。聞きなさい。きょう、あなたは、あなたの神、主の民となった。あなたの神、主の御声に聞き従い、私が、きょう、あなたに命じる主の命令とおきてとを行ないなさい。(申命 27:9-10)」ヨシャパテが死んでから、主の御声から離れていたところから、再び主に立ち返りました。アハブのもたらしたバアルの偶像をここにおいて取り除きます。イゼベルの娘アタルヤが、ユダの王と結婚することによってユダを汚していたのを、バアルの宮を取り壊し、その祭司を殺し、祭壇を壊したことで清めることができました。そしてもう一つの契約は、王と民の間における取決めです。

11:20 一般の人々はみな喜び、この町は平穩であった。彼らはアタルヤを王宮で剣にかけて殺したからである。11:21 ヨアシュは七歳で王となった。

すばらしいですね、アタルヤが取り除かれたことによって一般の人々は喜び、町に平穩が戻りました。正しい王が即位していることによって喜びと平和が取り戻されたのです。

ここで私たちが希望を持つことができるのは、「キリストが御座に着いておられる」ということです。アタルヤが女王になっていた時のように、自分の周りは悪魔が支配しているとしか思えないと感じることがあるでしょう。そして絶え間なく、魂の葛藤を抱きます。けれども、勝利をしているのは、イエスを神の子と信じる者たちであり、すでに世に打ち勝っているのです。ヨアシュが神の宮で育て

られていたように、キリストは天におられてそこから支配しておられます。主が定められた時に、必ず目に見える形での勝利が与えられます。その神の国が与えられるまで、私たちはキリストと共に統治するために、この地上において用意している者たちなのです。

2A 後戻りの富 12

1B 神殿修繕 1-16

1C 祭司への呼びかけ 1-8

12:1 ヨアシュはエフーの第七年に王となり、エルサレムで四十年間、王であった。彼の母の名はツイバヤといい、ベエル・シェバの出であった。12:2 ヨアシュは、祭司エホヤダが彼を教えた間はいつも、主の目にかなうことを行なった。12:3 ただし、高き所は取り除かなかった。民はなおも、その高き所でいけにえをささげたり、香をたいたりしていた。

ヨシャパテ以降、失われていた主なる神、ヤハウエへの信仰が回復する時期を、ユダ国は迎えます。ヨアシュ、その後のアマツヤ、そしてウジヤ、ヨラム、そしてアハズで一気に墮落しますが、ヒゼキヤがこれまでにない大きな宗教改革を断行します。

ヨアシュの治世の特徴は、2 節、「祭司エホヤダが彼を教えた間は」というところです。歴代誌第二 24 章に彼の生涯がもっと詳しく書かれています。エホヤダが死んだ後に、ユダのつかさたちが来て、彼をあがめた、とあります。そしてこのユダのつかさたちの影響を受けて、ヨアシュ自身もアシェラと偶像に仕えた、とあるのです。エホヤダの息子ゼカリヤがそのことを戒めましたが、なんとヨアシュは陰謀を企てて、彼を殺してしまいました。

ここから分かることは、「私たちが、主にあって独り立ちできるか？」という問いかけです。自分に霊的に良い影響を与えている指導者や人々がいるときは主に仕えることができても、果たして彼らがいなくなっても、自分はただ主のみに拠り頼むことができるのかどうか？ということです。私たちが思い出さなければいけないのは、後継者たちに対する先駆者の言葉です。モーセがヨシュアに対して言った言葉、ダビデがソロモンに対して言った言葉であります。どちらも、主の命令から右にも左にもそれずに、ひたすら主に拠り頼めという命令でありました。また新約時代では、主ご自身が弟子たちに、「わたしの命じたすべてのことを守り行なうように教えなさい」という言葉を残し、使徒パウロはテモテに、「ゆだねられたものを守りなさい(2テモテ 1:14 参照)」と命じました。

12:4 ヨアシュは祭司たちに言った。「主の宮にささげられる聖別されたすべての金、すなわち、各人に割り当てを課せられた金や、自発的に主の宮にささげられるすべての金は、12:5 祭司たちが、めいめい自分の担当する者から受け取り、宮のどこかが破損していれば、その破損の修理にそれを当てなければならない。」12:6 しかし、ヨアシュ王の第二十二年になっても、祭司たちは宮の破損を修理しなかった。12:7 それでヨアシュ王は、祭司エホヤダと、祭司たちを呼んで彼らに言った。「なぜ、宮の破損を修理しないのか。もう、あなたがたは、自分の担当する者たちから金を

受け取ってはならない。宮の破損に、それを当てなければならぬから。」12:8 祭司たちは、民から金を受け取らないことと、宮の破損の修理の責任を持たないことに同意した。

ヨアシュは、すばらしい志を主にあって与えられました。主の宮で破損したところを修繕するという事業です。私たちは、「たかが建物ではないか」と考えたら間違いです。彼らは、旧約という異なる神の経緯の中に生きています。主がこの建物にご自分の名を置くと決められました。新約においては、私たち信仰を持った者たち自身が、聖霊の宿られる神殿であります。したがって、主の宮の修繕とは、私たちがキリストの内に建て上げられる中で、罪を犯したり、まだ御霊に明け渡しておらず肉が働いているところであるとか、汚れを心に抱いているところであるとか、そういったところを主にあって直していただく、ということに他なりません。

このことにどれだけの優先順位を付けることができるのか？という問いかけであります。ヨアシュは、祭司たちが普段受け取っている金の一部を修理のためにあてがいなさいと初め命じました。祭司たちが受け取っているのは、主に二つあります。一つは、宮への納入金です。出エジプト記 30 章に、人が登録される時に宮に対して半シケルを支払わなければいけないという定めがあります(12-13 節)。ペテロが釣りをして魚から硬貨を得た目的は、この納入金を支払わなければいけなかったからです。もう一つは、誓願を立てる時です。自分自身を主に捧げたいのですが、その表れとして神殿にささげます。男性か女性かによって、また年齢によってその評価額が異なります。レビ記 27 章に詳しく書かれています。

こうした受け取った金から祭司たちが自発的に宮の修繕のために使うように王は促しました。ところが、長い期間が経っても、一向にお金が集まりません。自分の所得のようにして考えていたが、そこに甘えが出てきたのでしょうか。どうしても、宮の修繕のためにその一部を分けることができいていませんでした。そこで王は、指定献金をしてもらうように、一般の納入金と区別しようという考えを持ちかけました。祭司たちは同意しました。王としては、祭司であれば最もこのことを大事にするだろうと思っていたのですが、いや、次を見れば分かりますが、民のほうがもっと熱心だったのです。

ここから分かるのは、私たちが主への献金に対して点検をしなければいけないということです。主から祝福されて所得が増えているのに、果たして主に捧げる額が同じになっていないか？その祝福の徴によって主への献身が深まるのではなく、かえって世の思い煩いが増えていないかを考えるべきです。そういった意味で、献金は、私たちの主との関係を示すものさし、バロメーターであります。使徒パウロが、コリントにいる聖徒たちにこう言いました。「私がそちらに行ってから献金を集めるようなことがないように、あなたがたはおのおの、いつも週の初めの日に、収入に応じて、手もとにそれをたくわえておきなさい。(1コリント 16:2)」各々が、主の前で収入に応じて捧げるべき額を決めて、そして礼拝に臨みます。

2C 民への呼びかけ 9-16

12:9 祭司エホヤダは、一つの箱を取り、そのふたに穴をあけ、それを祭壇のわき、主の宮の入口の右側に置いた。入口を守る祭司たちは、主の宮に収められる金をみな、そこに置いた。12:10 箱の中に金が多くなるのを見て、王の書記と大祭司は、上って来て、それを袋に入れ、主の宮に収められている金を計算した。12:11 こうして、勘定された金は、主の宮で工事をしている監督者たちの手に渡された。彼らはそれを主の宮で働く木工や建築師たち、12:12 石工や石切り工たちに支払い、また、主の宮の破損修理のための木材や切り石を買うために支払った。つまり、宮の修理のための出費全部のために支払った。12:13 ただし、主の宮に納められる金で、主の宮のために銀の皿、心切りばさみ、鉢、ラツパなど、すべての金の器、銀の器を作ることはなかった。12:14 ただ、これを工事する者に渡し、これを主の宮の修理に当てた。12:15 また、工事する者に支払うように金を渡した人々と、残高を勘定することもしなかった。彼らが忠実に働いていたからである。12:16 罪過のためのいけにえの金と、罪のためのいけにえの金とは、主の宮に納められず、祭司たちのものとなった。

すばらしいですね、民の心に進んで捧げたいという志が与えられていました。そして王の命令に従って祭司エホヤダは、これを他のどんな目的にも使用しないように、ただ宮の修繕費を賄うことだけに集中させました。そして宮の修繕をしている関係者が忠実に働き、残高の勘定もする必要のないほどお金の動きに透明性がありました。

2B 尊厳の喪失 17-21

12:17 そのとき、アラムの王ハザエルが上って来てガテを攻め、これを取った。それから、ハザエルはエルサレムを目ざして攻め上った。12:18 それでユダの王ヨアシュは、自分の先祖であるユダの王ヨシャパテ、ヨラム、アハズヤが聖別してささげたすべての物、および自分自身が聖別してささげた物、主の宮と王宮との宝物倉にあるすべての金を取って、アラムの王ハザエルに送ったので、ハザエルはエルサレムから去って行った。

エフーの時代から、ハザエルがイスラエルに攻めて、その土地を削り取っていました。初めにヨルダン川の東、イスラエルの二部族半が住んでいた土地を攻め取っていました。その後、エフーの息子エホアハズと、その子ヨアシュの時もハザエルはかなりの打撃をイスラエルに与えています。そしてハザエルは、さらに南にも進出しました。ガテは、ペリシテ人の住むところです。さらにハザエルはエルサレムを目指しました。

そこでヨアシュはとんでもないことを行ないます。その脅威から逃れるために、これまで聖別してささげた金を取って、ハザエルに与えてしまったのです。自分自身の聖別したものはもちろんのこと、ヨシャパテの時から蓄えていたものを与えてしまいました。「聖別」したということは、それは主のものになっていたのであり、それを自分の利益のために使ってしまったということになります。

私たちが、ここで知らなければいけないことは、「主にあって蓄えられた霊的財産を、決して外に放出して無駄にしてはいけない。」ということです。一般の人間関係でも言えることですが、主との間にある信頼関係は長い期間をかけて培っていくものですが、それに損失を与えることは一瞬のうちに出てしまう、ということです。

12:19 ヨアシュのその他の業績、彼の行なったすべての事、それはユダの王たちの年代記の書にしるされているではないか。12:20 ヨアシュの家来たちは立ち上がって謀反を起こし、シラに下って行くヨアシュをミロの家で打ち殺した。12:21 彼の家来シムアテの子ヨザバデとシヨメルの子エホザバデが彼を打った。それで彼は死んだ。人々は彼をダビデの町に先祖たちといっしょに葬った。彼の子アマツヤが代わって王となった。

ヨアシュは、霊的に後退してしまいましたが、それは自分の家来たちにも悪い影響として及んでいました。家来が彼を暗殺したのです。これは北イスラエルではよく行なわれていたことですが、まさかユダ国においてこんなことが、というショッキングなニュースであります。私たちが知らなければいけないのは、主との間に問題が生じると、人との間にもその影響が及ぶということです。言い方を変えれば、人との間に問題が生じていることは、神との関係が大丈夫なのか自分自身を調べないといけないということでもあります。

3A 憐れみの救い 13

そして 13 章に入ります。舞台は北イスラエルに戻ります。

1B アラムによる懲らしめ 1-9

13:1 ユダの王アハズの子ヨアシュの第二十三年に、エフーの子エホアハズがサマリヤでイスラエルの王となり、十七年間、王であった。13:2 彼は主の目の前に悪を行ない、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムの罪を犯し続けて、それをやめなかった。13:3 それで、主の怒りがイスラエルに向かって燃え上がり、主は彼らをアラムの王ハザエル、および、ハザエルの子ベン・ハダデの手にいつまでも渡しておられた。

エフーの子エホアハズの治世です。父と同じようにヤロブアムの罪から離れませんでした。そこで、主がハザエルの手にイスラエルを渡されました。

13:4 しかし、エホアハズが主に願ったので、主はこれを聞き入れられた。アラムの王のしいたげによって、イスラエルがしいたげられているのを見られたからである。13:5 主がイスラエル人にひとりの救い手を与えられたとき、イスラエルの人々はアラムの支配を脱し、以前のように、自分たちの天幕に住むようになった。

かつての士師の時代を彷彿させます。イスラエルが主の前に悪を行なって、バルやアシュタロ

テに仕えたので、主が敵の手に彼らを引き渡されました。けれども、その苦しみの中で彼らが主に叫び求めたら、主は救出する者、士師をイスラエルに与えてくださいました。同じように、主が救い手を与えられました。おそらく、この救い手はアッシリヤの王のことを指しているのではないかと思われれます。アッシリヤがダマスコを攻めたので、ダマスコはそちらのほうに軍を動かしたため、その間にイスラエルが以前攻め取られたところに再び住み始めました。

13:6 それにもかかわらず、彼らはイスラエルに罪を犯させたヤロブアム家の罪を離れず、なおそれを行ない続け、アシェラ像もサマリヤに立ったままであった。13:7 また、アラムの王が彼らを滅ぼして、打穀のときのちりのようにしたので、エホアハズには騎兵五十、戦車十台、歩兵一万だけの軍隊しか残されていなかった。13:8 エホアハズのその他の業績、彼の行なったすべての事、およびその功績、それはイスラエルの王たちの年代記の書にしるされているではないか。13:9 エホアハズは彼の先祖たちとともに眠り、人々は彼をサマリヤに葬った。彼の子ヨアシュが代わって王となった。

これも、士師の時代と同じです。主が彼らの苦しみの中の叫びを聞かれて、救い手を与えられたのに、彼らはその助けを得た後にすぐ、再びヤロブアムの罪を繰り返しました。それで、アラムによる攻撃は再開され、彼らの武力が最小限にまで削り取られたのです。

2B 主の勝利 10-25

1C 最後の務め 10-19

13:10 ユダの王ヨアシュの第三十七年に、エホアハズの子ヨアシュがサマリヤでイスラエルの王となり、十六年間、王であった。13:11 彼は主の目の前に悪を行ない、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムのすべての罪から離れず、なおそれを行ない続けた。13:12 ヨアシュのその他の業績、彼の行なったすべての事、およびユダの王アマツヤと戦ったその功績、それはイスラエルの王たちの年代記の書にしるされているではないか。13:13 ヨアシュは彼の先祖たちとともに眠り、ヤロブアムがその王座に着いた。ヨアシュはイスラエルの王たちとともにサマリヤに葬られた。

11-12 章で、アハズヤの子ヨアシュがユダを治めていた話を読みましたが、彼の統治 37 年目には、同名の王が北イスラエルにも出てきました。エホアハズの子ヨアシュです。エホアハズの子ヨアシュは、父と同じようにヤロブアムの罪から離れませんでした。そして、ヨアシュが死んだ後は、彼の子ヤロブアム二世が王座に着きます。ところで、ユダの王アマツヤと戦ったとありますが、これは次回、14 章で読むこととなります。

ここまで、エフー、エホアハズ、ヨアシュの三代が同じ道を辿っていることを見ることができたでしょう。みなヤロブアムの罪を離れなかったこと、そして主の懲らしめとして、アラム王がイスラエルを攻めていたということです。そこで次の話が出てきます。

13:14 エリシャが死の病をわずらっていたときのことである。イスラエルの王ヨアシュは、彼のところに下って行き、彼の上に泣き伏して、「わが父。わが父。イスラエルの戦車と騎兵たち。」と叫んだ。

アラムによって懲らしめを受けていたヨアシュは、エリシャの死を見届けなくなり、思わず叫んだのは「イスラエルの戦車と騎兵たち」でありました。ヨアシュは分かっていたのです。心の奥では、イスラエルの神、主との関係こそがイスラエルを強くしているのだ、そしてそのしもべがエリシャであるということは分かっていたのです。神の預言者を非常に敬っていましたが、自分自身が主のみに仕えるところまで行っていなかった、ということです。

けれども、驚くべきことがあります。エリシャは自分が死のうとしているのに、この願いと叫びを聞いて、それを主にあって応えるということです。最後まで主に仕える、ということを経験し通しました。

13:15 エリシャが王に、「弓と矢を取りなさい。」と言ったので、彼は弓と矢をエリシャのところに持って行った。13:16 彼はイスラエルの王に、「弓に手をかけなさい。」と言ったので、彼は手をかけた。すると、エリシャは自分の手を王の手の上にのせて、13:17 「東側の窓をあけなさい。」と言ったので、彼がそれをあけると、エリシャはさらに言った。「矢を射なさい。」彼が矢を射ると、エリシャは言った。「主の勝利の矢。アラムに対する勝利の矢。あなたはアフェクでアラムを打ち、これを絶ち滅ぼす。」

エリシャは、体を動かすこともできない不自由な身でしたから、このように象徴的な動きをヨアシュに行なわせることによって、彼が主にあって戦うことができるよう強く励ましました。アフェクは、ガリラヤ湖の東にある、今のゴラン高原にある町でしたが、その戦略的なところで戦いに勝つことができる、つまりアラムの支配から脱することができるかと励まされたのです。

13:18 ついでエリシャは、「矢を取りなさい。」と言った。彼が取ると、エリシャはイスラエルの王に、「それで地面を打ちなさい。」と言った。すると彼は三回打ったが、それでやめた。13:19 神の人は彼に向かい怒って言った。「あなたは、五回、六回、打つべきだった。そうすれば、あなたはアラムを打って、絶ち滅ぼしたことだろう。しかし、今は三度だけアラムを打つことになる。」

エリシャは、アフェクでの戦いを梃にして、徹底的にアラムを打ちのめすことを、この地面に矢を打つことによってヨアシュに行なわせました。ヨアシュは、「何もそこまで徹底的に行なわなくてもよいではないか。」と心で思ったのでしょう、その中途半端な心が、実際の戦いではなくとも、矢を三度打ってやめたところに表れていました。

主は私たちの、恵みの御業を用意しておられます。私たちが熱心になるから、主が大きく働いて

くださるのではありませんが、主の恵みの御業に信じて積極的に応答することによって、初めて神の大いなる業を見ることができます。自分の信仰が受け身になっているか、それとも「求めなさい、捜しなさい、叩きなさい」というイエス様が命じられたような積極性を持っているか、確かめてみる必要があります。

2C 死後の務め 20-25

そしてエリシャの驚くべきことは、次です。彼は死ぬ直前に、主にある働きをヨアシュを通して行なうだけでなく、完全に死んでしまい、骨になってしまっても、命を与える働きを行なうのです！

13:20 こうして、エリシャは死んで葬られた。モアブの略奪隊は、年が改まるたびにこの国に侵入していた。13:21 人々が、ひとりの人を葬ろうとしていたちょうどその時、略奪隊を見たので、その人をエリシャの墓に投げ入れて去って行った。その人がエリシャの骨に触れるや、その人は生き返り、自分の足で立ち上がった。

アラムの襲撃に加えて、モアブからの略奪隊が来ていました。これはイスラエルに対する神の懲らしめの徴です。その略奪隊から逃れるために、遺体をエリシャの墓に入れたら、何とエリシャの骨に触れて、その人が生き返り、自分の足で立ち上がりました！

私たちは、墮落し、背教したイスラエルに、これまでエリヤによって、またエリシャによって神が回復の道を与えてくださったところを見ました。エリヤに対しては、真っ向から対立する神の裁きの言葉が委ねられましたが、エリシャに対しては、神の恵みと命、また慰めや癒しの業が委ねられました。それはまさに、エリヤの霊と力によって来たバプテスマのヨハネと、その働きを継承しつつ、恵みと命、癒しと慰めを与えられたイエスご自身の働きを表しています。

イエス様は、数々の奇蹟を行なわれ、エリシャのように、いやエリシャ以上に苦しんでいる人を解放する働きを行なわれましたが、ご自身は十字架上の死に委ねられました。けれども、三日目によみがえられ、そしてご自身を信じる者に復活の約束を与えられました。エリシャの骨に触れた者が生き返ったように、イエス・キリストによって自分の人生が触れられた者は生き返ります。イエス様は言われました。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。(ヨハネ 11:25)」

信じるということが、これだけ全能の神の力が働くものであるということを私たちは、エリシャの生涯によって学び、また体験する必要があるでしょう。この方の裾に触りさえすれば直る、と信じた長血を患う女がいました。そしてイエスの名によって足なえを立ち上がらせたペテロには、せめて彼の通る影にでも触れられたら癒されると思って、病人を連れて来たという場面もあります。イエスの名によって、私たちも同じ体験をしていきたいです。

13:22 アラムの王ハザエルは、エホアハズの生きている間中、イスラエル人をしいたげたが、
13:23 主は、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約のために、彼らを恵み、あわれみ、顧みて、彼ら
を滅ぼし尽くすことは望まず、今日まで彼らから御顔をそむけられなかった。13:24 アラムの王ハ
ザエルは死に、その子ベン・ハダデが代わって王となった。13:25 エホアハズの子ヨアシュは、そ
の父エホアハズの手からハザエルが戦い取った町々を、ハザエルの子ベン・ハダデの手から取り
返した。すなわち、ヨアシュは三度彼を打ち破って、イスラエルの町々を取り返した。

これが、神が北イスラエルに対する姿勢でした。一つは、エフーの功績に対する神の報いがあり
ます。エフーの家を四代まで続かせると神は約束されました。そしてもう一つは、ここにあるように、
アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こし、彼らの不従順にも関わらず、恵み、憐れみ、彼
らを滅ぼし尽くすことを望まれませんでした。レビ記 26 章においても、イスラエルが土地から引き
抜かれて流浪の民になっても、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こし、彼らを立ち返ら
せるという約束を与えてくださっています(41 節参照)。

そして、この約束に基づいて、ヨアシュが戦いました。アラム王は、ハザエルからベン・ハダデ三
世になりました。彼と戦って、エリシャが預言したように、三度戦って、その分のイスラエルの町々
を取り返しています。

私たちもこの、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約の中にいることを知っていますか？私たちは、
イエス・キリストを信じる信仰によって、霊的にアブラハムの子孫になっています。アブラハムに与
えられた祝福の約束が、異邦人である私たちにも、イエス・キリストのゆえに実現されていくのです。
つまり、不従順な私たちにも主は憐れみをかけ、見捨てることはされず、恵みを与えてくださいま
す。もちろん、懲らしめはあります。エホアハズ、ヨアシュの時代にイスラエルは苦しみました。け
れども、主との関わりにおいては決して見捨てられない、顔を背けたりは、なさらないのです。この
主の慈しみを自分の肉に従うために用いるのではなく、むしろ悔い改めのために用いて、主の癒
しや慰めをいっぱい受けてくださいますよう、お祈りします。